

追 悼

千地万造先生を偲んで

三重県総合博物館 布 谷 知 夫

千地万造先生は2015年1月31日に帰らぬ人となられた。訃報をメールでいただいたのは2月1日の午後であった。お体が弱っておられたのは知っていたが、急なことに驚いた。こちらの都合にかまけて、しばらくお目にかかる機会が無かったことが悔しい。

先生にはそれこそ私の人生の大事な場面で、何度も世話をおかけしていた。千地先生が居られなければ、今の私は全く違った場所で、違ったことをしていただろう。

初めてお目にかかったのがいつだったのかははっきりとは覚えていない。まだ大学院に進む前の学生時代だった。当時、大阪市西区の鞆公園内の大阪市立自然科学博物館に、日本自然保護協会関西支部の事務所があり、博物館の館長であった先生は、関西支部の事務局長のような立場で活動しておられた。当時、自然保護運動に関心を持つ学生集団が関西支部の手伝いなどをしており、そういう一人として私も博物館に行き、学生の幹事のようなことをしたのが最初だった。当時の関西支部は非常に活発に活動しており、関西各地の様々な自然保護の問題に取り組んでいて、定期的に役員会も開かれ、その役員会にも出席させていただいていた。その役員会のメンバーは関西の生物学や生態学の重鎮がそろっており、森林生態学を学び始めていた私は、非常に強い影響を受け、結局今も日本自然保護協会のお手伝いをしている。

先生は、自分は地質屋なので、自然の開発が無

いと研究が進まない分野で自然保護とは反対の立場だけれども、だからこそそういう立場の研究者が自然保護に関わることは大事なことだと思っている、ということをご自己紹介などのたびにおっしゃっていた。そして生物系の大学教授などを前に立てて、ご自分は事務局を担当してそういう運動を実質的に進めていく役割に徹しておられた。

その後鞆公園にあった博物館はリニューアルして長居公園に移転、新館が開館し、その際の学芸員6人の増員の最後の1人として、普及担当学芸員という肩書の募集がかかることになり、千地先生から試験を受けてみないか、と教えていただき、受験した。たしか32倍の高倍率だったが、運よく合格して、学芸員として働くことになった。

その後、日本自然保護協会の関西支部は本部の都合で解散となり、関西支部の役員を中心として、自然保護について発言している関西の研究者に声をかける形で、関西自然保護機構の立ち上げとなった。事務所は博物館に置かれ、千地先生は理事であり、実質的な責任者で、私は世話役の事務局のような形で、お手伝いをさせていただいていた。

就職してすぐのころには、何度か先生の調査旅行に同行したことがある。先生は有孔虫の化石を研究されており、そのサンプル採集のお供の形であったが、何も役に立つはずもなく、ただいろいろと昔からのこと、博物館の事を話しておこうと思われたのだろう。博物館のイロハも知らないで勉強しない学芸員を見るに見かねて、必要なこと

を教えておこうと思われたのかもしれない。ただ先生のお供をして山をうろうろしたことが記憶に残っている。そして千地先生の秘書役をし、自然保護協会の事務を執っていた女性と知り合うことになったのも、先生からの御縁ということだ。

ひとつ白状しておこう。開館して間もない新しい博物館で普及教育活動の担当者になり、友の会と博物館行事と普及誌（Nature Study）の編集担当という三部門の仕事をし、何とか最低限度の仕事はしていたが、新しいアイデアなどわかるはずもなかった。ある日、千地先生に呼ばれ、1枚1テーマの図の多い解説シートを作り、展示室に置いて自由に持ち帰ってもらうというのはどうか、というアドバイスを頂き、それを企画としてまとめて学芸員の会議で提案して、実施することになった。これは月に1種類ずつの「今日はこれを見ていこう」というシリーズのシートとして学芸員が分担して執筆し、かなり長期間にわたって発行された。これは私が実施した新しい仕事ということになっているが、アイデアは千地先生からの受け売りであり、何も考えていないような私を心配されたのだろう。会議の後で当時の学芸課長から、「布谷君もいろいろ考えてるんやなあ」と声をかけてもらったのをよく覚えており、千地先生のアイデアです、とは言わなかったのが、今でも気にかかっている。

館長としては、普段は学芸員とあまり行き来はなかったが、年に1度の職員旅行などでは意外な面も見せておられた。普段の紳士としての面と違って、くだけると、とことんくだけ、お茶目というか、学生のようなノリではしゃいでおられることもあり、かなり違った雰囲気で、学芸員や職員と楽しく過ごしておられた。当時の大阪市は55歳定年で、定年後は徳島県博の館長、橘女子大学の教授、学長を歴任された。

橘女子大学におられたころ、滋賀県が新しい県

立博物館を作ることが決まり、滋賀県に学芸員経験者を1人欲しい、大阪には同じ年齢の学芸員が何人もいるので、誰か来てくれないか、という話があり、結果として私が大阪市を退職し、割愛人事によって滋賀県に行くことになった、先生は滋賀県の新博物館の基本構想委員会のメンバーであり、またその委員の何人かと委員長は関西自然保護機構の役員でもあり、多くの方の顔見知りということで推薦していただいたのだと思う。

千地先生が橘女子大学学長になった時に、大学での博物館実習の授業を代わりに持ってほしいと言われ、3年間ほど初めての大学での授業、それも女子大という経験をした。先生の研究室を使わせていただき、カリキュラムも真似をしながらの授業だった。この後に琵琶湖博物館が開館して、私は博物館の側の事情もあって専門を生物学分野から博物館学に転向し、開館翌年に初めての博物館学の論文を学会誌に発表した。私は現場の学芸員経験はあっても、博物館学に対しての意識がそれほどあったわけではないが、大学での博物館実習の授業を準備・実施したことがそのきっかけになったのだと思う。ついでながらこの当時は大学の新入生獲得競争が激しくなっていた時期で、先生の提案で大学の名前が変えられた。橘女子大学ではどこにあるのかもわからないが、京都橘女子大学とすることで憧れの京都の大学と思ってもらって、入学希望者が増えるだろう、と笑って話しておられた。いかにも先生らしい大胆でありながら繊細なアイデアだと思ったものだ。

私は滋賀県の琵琶湖博物館で18年間仕事をし、定年後に三重県立博物館の常勤館長となったが、博物館事務所に久しぶりに先生から電話があり、博物館学や地学の専門書はいくつかの機関に寄贈したが、まだ家に残っている本を三重県の博物館で引き受けてもらえないか、ということだった。ほとんど博物館学の本が無い県立博物館であるた

めにありがたく、すべていただくことにした、最初はダンボールで10箱ほど、その後も何度か電話があって、追加を送っていただいた。また千地先生が日生財団から依頼されて、おそらく30年近く毎年全国の2館程度のカラーの博物館総合案内という冊子を作るという事業の委員長をしておられたが、琵琶湖博物館の時にも、お世話をおかけして作っていただき、三重県でも新しい博物館が開館したら作りましょうという話で、日生財団の担当者と一緒に古い博物館に来ていただいたことがある。

この時には歩くのが少し御不自由と聞いていたので、時間をお聞きして車で駅までお迎えに上がったのだが、改札から出ておいでにならず、どうしようかと相談していると、もう博物館に着かれたとの電話があった。どうも早くにおいでになり、昼食をとられて、博物館においでになったらしい。大慌てで博物館に戻った。実はこの時が直接に先

生にお目にかかった最後の機会となった。そしてこの本は、ようやく写真や原稿の作成が終わり、現在編集作業がされている。

こうして思い出してみると何と多くのことで先生にお世話をおかけし、それに対して私は先生に対して何も恩返しができていないことかと思う。

大阪市立自然科学博物館の初期から自然史博物館の事業までを一緒に進めておられた学芸課長の日浦勇さんは若くして亡くなられたが、お葬式の時の千地先生からの弔辞の冒頭で、「日浦君、聞こえますか、聞こえていますか」と何度も呼びかけておられた。そして今度は先生が向こうに行ってしまった。何かあるたびに「布谷君、どうしてるの」と声をかけていただき、電話をしていた声が今も耳に残っている。

千地万造先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。